



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	動物園における見世物性の再考 : 近代動物園と動物見世物の関係
Author(s)	平, 侑子
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 21, 3-20
Issue Date	2015-09-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59856
Type	departmental bulletin paper
File Information	1.Taira.pdf



動物園における 見世物性の再考 —近代動物園と動物見世物の関係—

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程

平 侑子

平 侑子
TAIRA Yuko

Re-examining Animals in Japanese zoos as Spectacle for Contemporary Consideration

TAIRA Yuko

This research will demonstrate how animals were seen as spectacles in the Edo period and continue to influence today's modern zoos.

abstract

Zoos have four main purposes: conservation, education, science and recreation. Interestingly, little attention has been given to the function of zoos as places of 'recreation.' The recent, growing trend has been concerned with the effects of education on visitors. In order to thoroughly understand the aspects of 'recreation,' this paper will focus on the spectacle side of animal attraction. This investigation considers that even before the establishment of the first Japanese zoo, people have enjoyed animal recreation. Accordingly, I hope to present fundamental ideas in support of how these recreational elements remain embedded in modern Japanese zoos. I will do this by referring to academic articles, newspapers and magazines.

1 はじめに—研究の目的と方法

本稿は、日本の動物園における「博物学的なまなざし」（吉見1992）と、動物見世物の関係を考察したものである。日本で最初に動物園が誕生したのは明治時代のことである。明治に入り、博覧会や博物館とともにヨーロッパから輸入された日本の動物園の中に、文明開化が起こる以前の日本の動物の楽しみ方を見いだせるか否か、見いだせるのであればいかなる形態で見出すことができるのかという問いを設定し、「博物学的なまなざし」との比較によって考察を行う。

動物園には、「種の保存」「調査・研究」「教育・環境教育」「レクリエーション」という4つの目的がある¹。「種の保存」「調査・研究」は動物園側が取り組むことであり、来園者に直接的に関係するのは「教育・環境教育」と「レクリエーション」である。中でも「教育・環境教育」は、近代の産物と言われる動物園の特徴を如実に表している。なぜなら、他の博物館施設と同様に動物園は、民衆の教育・啓蒙を目的とし、世界中の動物を体系的に展示しており、民衆は吉見が定義する近代特有の「博物学的なまなざし」によって展示物を見ることが暗に期待されているからである（吉見1992）。しかし、一方の「レクリエーション」は、実のところ確たる定義づけや位置づけがなされていない。動物園におけるレクリエーションとはいったい何なのであろうか。人々は動物園において「教育」「学習」の対象以外に、動物をどのように見ているのであろうか。

本稿では、近代動物園における一種のレクリエーション的側面には、近世の動物見世物へのまなざしが存在すると仮定する。近代動物園誕生の地であるヨーロッパでは、動物園の前身として、王侯貴族らが動物を収集したメナジェリーがあった。メナジェリーが市民へ開放されたり、動物学協会によって園が運営されるようになるなど、いくつかの段階を経て現在の社会教育施設としての動物園が確立している。一方日本の場合、そのような下地がほぼ存在しないままに、明治時代にヨーロッパに倣う形で動物園が設立された（佐々木1987）。それ以前の日本では、大衆が見世物興行で外国産の動物を目にする機会はあったが、やはり世界中の動物を一か所に収集する動物園と、いくつかの珍獣を連れて各地で興行をする見世物では性質上大きな隔たりがあっただろう。日本における動物園の誕生は、メナジェリーから動物園へという経緯をたどったヨーロッパと比較すると、少々いびつな成り立ちをしているのである。この経緯から考えると、明治時代になって大衆が急に「博物学的」に動物を見つめるようになったとは考えにくく、近世の動物見世物へのまなざしは近代動物園においても残っていたという仮説が立てられる。

よって、本稿では日本の動物園のレクリエーション、とくに「動物を見ることがの楽しみ」という面に近世動物見世物に共通するまなざしが存在していると考え、近代動物園において動物見世物の要素がどのように残存してきた

▶1 日本動物園水族館協会「JAZAについて」<http://www.jaza.jp/about.html>（2015年6月閲覧）

のかを明らかにする。その方法として、動物園関係者らが行ってきた動物園史研究や見世物の文化史研究における文献を参照するとともに、当時の新聞や動物園雑誌などのメディアから事例を用いて論じる。

まずは第2節で、そもそもこれまで動物園研究者によって動物園の「レクリエーション」とはどのように捉えられてきたのかを整理する。第3節では、近代以前の日本における動物見世物とはどのようなものであったのかを示し、その特徴や性質を整理する。第4節では、近代に入り「博物学的なまなざし」が民衆に根付くとともに見世物性の否定が始まった様子を示し、両者の関係を明らかにする。第5節では、動物見世物の要素が日本の動物園の中でどのように残存していったのかを新聞記事等から具体的な事例を用いて明らかにし、第6節に結論を述べる。

2 | 研究の背景—動物園の「レクリエーション」に対する言説

そもそも、動物園のレクリエーションとはどのようなものだと考えられてきたのだろうか。前述した動物園の4つの目的のうち「種の保存」「教育・環境教育」「調査・研究」とは異なり、「レクリエーション」に関しては説明がなおざりになっている場合が多い。例えば、日本動物園水族館協会のウェブページには、他の3つの目的については詳しい説明や目標、具体的な活動内容が書かれている。しかし、レクリエーションに限っては、「天気の良い日、家族や友だちと一緒に、生き物を見にいくことは楽しいですね」と述べるに留まっている。市民ZOOネットワーク²は、動物園が「ともすればレクリエーション一色に染まってしまう」のを防ぐために、「種の保存」や「環境教育」について具体例を示しながら詳しく解説している（市民ZOOネットワーク2004：11）。しかし、肝心のレクリエーションとはどういうものなのかはほとんど説明がなされていない。田中も4つの目的のうち3つは解説するものの、『「レクリエーション」』については説明するまでもないだろう」と述べ説明を省いてしまっている（田中2013：178）。元上野動物園園長の中川は、「動物園という所は、理屈抜きに楽しい。大人も子どもも無条件に楽しむことができる」と述べている（中川1975：71）。このように、動物園のレクリエーションとはもはや説明するまでもないものとして扱われ、その詳しい性質にはなかなか触れられてこなかった。

動物園研究においても同様のことが言える。近年は、並木を中心に、動物園の教育的効果に注目した研究が充実してきている。並木は、多摩動物公園のチンパンジー館の旧展示と新展示において、親子連れが何をどのように学んでいるのかを比較検討をすることで、「野生生物を人々に知ってもらおう」「野生における生態を知ってもらい、野生生物保全に関心を持ってもらおう」という使命がどれほど果たされているのかを考察してきた（並木2005）。廣瀬は、動物園における経験が幼児の動物への興味・関心にどう影響するのかを面接

▶2 市民ZOOネットワークとは、「動物園を通して人と動物の関係を考える」をテーマとして活動するNPO法人。動物園の取り組みを表彰する環境エンリッチメント大賞の主催や、動物園に関する調査・研究、セミナーや勉強会などを開いている。

法で調査し、最終的に生物の多様性への理解を促進させることを研究の狙いとしている（廣瀬2013）。しかし、充実する教育面の研究とは対照的に、動物園のレクリエーションを考察した研究は管見の限り見当たらない。

ただし動物園関係者の中には、レクリエーション機能の具体的な解説を試みている人もいる。例えば、前述の中川はレクリエーションについてもう一つ、「人間性の回復」という記述を残している。中川の言う「人間性の回復」とは、「あまりにもメカニカルな都会の生活」から動物を見ることで、「生物としての人間」を見直すことである（中川1975：74-77）。同じく元上野動物園園長の古賀は、「自然をこわさづになるべく無柵式といつて、太い鐵の檻を通さずに動物を見たり、なれた動物の面白い藝を見たり、お猿電車に乗つたり、考えるだけでも愉快になります」と説明する（古賀1950：8）。上野動物園管理課長であった佐藤は、「生物、動物から得る自然な気持を楽しむ慰養要素」の他に、「各種の珍しい動物を見ると云うことが非常な魅力」であり、「人間が絶えず進化しようとする欲求」「珍しいものを物色する本能」「魅力のないものにあきたらない知的感覚」を満たすものと解説している（佐藤1954：2）。これらは現在から60年以上前の解説ではあるが、先の「理屈抜きの楽しさ」と比較して、より具体性を帯びた説明ではある。だがその反面、彼らが述べるレクリエーションの内容には統一性が見いだせない。

ここまで概観してわかる通り、動物園におけるレクリエーションとは未だその性質に一貫した説明は与えられず、具体的な解説を試みても雑多で捉えどころがないものであった。この曖昧な概念を考察するにあたり、本稿では「動物を見る楽しみ」という点に限定して議論を進めたい。たしかに、動物園のレクリエーションには公園としての一側面も含まれる。例えば、都市公園について研究をする堀江は、「休養や休息、散策、自然とのふれあい、運動、遊び、趣味、芸術活動、教養など、多様な余暇活動や健康増進活動」をレクリエーション機能として規定しており、これらの側面から動物園のレクリエーションを考察することも可能であろう（堀江2011：9）。しかし、動物園とは動物が飼育されている場であり、来園者は動物を見ずに帰ることはない。動物園で「動物を見る」のは来園者として最も基本的な行為であり、そこに居る人々の行動の大前提である。よって、本稿では主に動物を見るという行為に着目することとする。

では、動物を見る楽しみとは、どのようなものであろうか。松浦は、近世ヨーロッパの動物見世物を取り上げて、それを「博物学的な知の普及とはまったく無縁の純粹娯楽」とであると指摘する（松浦1998：2-17）。松浦が挙げている動物見世物には、「エキゾティックな動物の引きまわし」や動物の芸が示されており、これは先ほどの古賀や佐藤がレクリエーションの要素として挙げていた「面白い藝」「珍しい動物を見る魅力」とも共通している。動物見世物の存在が、レクリエーションあるいは「娯楽」という括りで示されているのである。ただし、松浦は動物園における見世物性については詳しく述べておらず、近代動物園においていかなる形で見世物の要素が現れているのかは明らかになっていない。

3 見世物の定義と性質

次に、「近代社会の典型的所産」（伊藤1987：2）である博物館が誕生する以前に人々に楽しまれていた見世物を取り上げ、大衆がそれに向けていたまなざしを整理する。まずは、見世物の文化史研究において、見世物がいかなる定義をされてきたのかを概観する。

例えば、郡司による説明は『見世物』は『見せもの』であろうから、見せるという行為を売り物にすることによって成り立つ商売である。もっとも見せるものがなくてはならぬが、それは物質でも、人間の身体でも、また技術でもよい」とし、抽象的な表現にとどまっている（郡司1991：234）。一方、関山は具体的に何が「見世物」に相当するのかを挙げているが、「能・狂言・浄瑠璃・歌舞伎・落語・講釈・舞踊・相撲や色物類（寄席演芸）はすべて『見世物』という概念で把握されている」というように、現代では一般に高尚な芸能と捉えられているものまで幅広く「見世物」の範疇に入れている（関山1991：226）。田之倉に至っては、見世物か否かの境界は「無限に広大」であり、『見世物』の定義は不可能」と断言している（田之倉2005：189）。このように、見世物と考えられるものはいくつも挙げられる一方で、それら全てを一括りにした一般的な定義は見つけられない。しかし、見世物を研究する川添や橋爪らは、見世物小屋に関して、仮設建築であることからの「その場主義」という特性を指摘する（川添ほか2003：111）。川添らは、「その場主義」という言葉を恒久的、永続的という単語の対極にあると位置づけ、次のように説明する。

そこに異質な場があらわれて、ひとめ見たいとか、聞きたいとか、気持ちがいいとか、そういうプリミティブな感覚の論理で動いていて、ある時間を楽しませてくれるけれど、ふっと消えてしまう。（川添ほか2003：108）

近世の見世物と呼べるものを具体的に挙げていくと際限がないが、これらの特徴の一つとして、ずっと見続けるものではなく、一時の楽しみ、すなわち「その場主義」の楽しみを有しているということができる。

次に、動物園と関連するであろう動物見世物に焦点を当てて考察を続ける。朝倉は『見世物研究』において、見世物を次の3つに分類している（朝倉2002：13）。

1. 手品、軽業、曲独楽、力曲持等の技術類
2. 奇人、珍禽獣、異虫魚、奇草木石当の天然奇物類
3. 煉物や張抜きの人形、籠貝紙菊等の細工物類

動物に関する見世物は、このうちの2番目に相当する。黒田は、これにあたる見世物を「異人性・異類性・異界性の極致を人々にプレゼンテーション

するもの」とし、それらがもつ奇怪さこそが人々を吸い寄せたと指摘している（黒田1994：60-61）。また、この「天然奇物類」の中でも特に動物に限定して言えば、「狼、猪、狐など日本産だが比較的珍しい動物」「霊獣、千年土龍などもっともらしい名をつけたもの」「牛や犬などの畸形」「鯨やアザラシといった海獣」「孔雀、鸚鵡などの唐鳥」「虎、象など外国渡りの動物」「魚類」の7つに分類できる（古河1970：153）。

古河によると、この7種の動物見世物の中で最も人気が高かったのは舶来動物である。トラやヒョウ、ヒクイドリなどが来日して見世物となったが、特に話題を呼んだのがラクダであった。川添はラクダについて、インドゾウと共に近世後期の動物見世物では一、二を争う人気ぶりであったと述べる（川添2000）。このような見世物動物に対して、人々はいかなるまなざしを向けていたのであろうか。

川添は、近代後期の動物見世物について、舶来動物の珍しさ、ありがたさを基点にしながら、この時代なりの異国イメージの演出と、舶来知識の吸収がおこなわれたと指摘する（川添2000）。さらに、「有り難い」ものに対して悪病払いや疱瘡除けなどのご利益が付加され、見知らぬものに対する「よろこびと畏怖」の感情が人々に持たれていたと指摘している。例えば、見世物が民衆のもとへ来る際に、ラクダやゾウの糞尿が特効薬になるという風説が流布された。また、見世物動物を描いた絵は悪病払いの効能があったと考えられており、「ご利益つきのピラ」も製作されていた。さらに絵図に限らず、例えばラクダの毛、玩具、双六、ラクダの絵入り扇なども販売されていた。動物見世物の重要な要素には、奇怪さ・珍しさだけではなく、動物に対するある種の信仰が含まれているのである。社会学者の加藤は、朝倉の分類の中の同じく2番目「天然奇物類」に含まれる奇形の人々に注目している。加藤は、観覧者のまなざしの中にある「これといって宗派を名指すことのできぬ、ワケのわからない宗教性」の存在を強調する（加藤1965：11-17）。それは、今日でも有名な「親の因果が子に報い」という見世物口上からも見出すことができる。

舶来動物の他には、犬や猫、狸など比較的身近な動物に芸を仕込んで見世物にしていた例もある。猫の頭に乗る鼠の見世物や、犬が猿に乗りながら曲芸をする見世物、三味線の歌に合わせて猫が踊る見世物、山雀の梯子登りや籠抜けなど、さまざまな動物芸が行われていた（内藤2009、古河1970）。

ここまでを整理すると、動物見世物の形態には、大まかに「珍しい動物を見せる」、「さほど珍しくない動物に芸をさせる」という2点を挙げることができる。またその楽しみ方の派生として、ご利益を謳った商品が作られていた点も興味深い。さらに、人々が動物見世物へ向けるまなざしには2種類あり、一つが奇怪なもの・珍奇なものへの好奇心、そしてもう一つがある種の宗教的観念を背景とする畏怖の感情であったと考えることができる。

4 見世物性の否定の始まり

4-1. 動物園の設立と「博物学的なまなざし」

動物見世物へまなざしを向ける場は、近代が近づくにつれて「博物学的なまなざし」を機能させる場にとって代わられるようになる。本節では、日本に博覧会や博物館、そしてそれに伴い「博物学的なまなざし」がもたらされた過程を整理する。

吉見によると、18世紀に博物学が最盛期を迎え、世界を体系化して分類・配置する新たな視覚の制度が現れた。これらは博物館や動植物園で発展してきたが、1851年ロンドン万博を機に、多くの民衆に浸透することとなった。博覧会には、世界を俯瞰するパノラマが用意され、その新しい視覚的な刺激が人々を魅了していった。それに伴って、それまでの庶民の歓楽であったバーソロミュー・フェアが幕を閉じる。バーソロミュー・フェアとは、年に1度、8月下旬から9月上旬にかけて開催されたロンドンで最大かつ最も長命の縁日であった。アメリカの文学者オールティック (Altick, R.D.) によると、そこには芝居、賭博の他に、「生きた珍品の小屋」も存在しており、何万人もの人々が「食い、飲み、賭博をし、けんかをし—そして、とりわけ、ただぼかんと見とれた」という (オールティック1978:98-101)。ここでいう「生きた珍品」には、奇形の人々や黒人の他、サルやゾウ、トラなどの動物を指している。吉見によると、このフェアの終幕は、人々の娯楽が祝祭的な空間から博覧会や博物館に見られる秩序化された空間への移行を意味している (吉見1992)。

万国博覧会と日本の関係に关していえば、1862年に遣欧使節団が第二回ロンドン万国博覧会を視察し、1867年には徳川幕府や薩摩藩・佐賀藩がパリ万国博覧会へ出品している。そして1873年に明治政府がウィーン万国博覧会に参加し、この博覧会を参考に1877年には日本で第一回内国勸業博覧会が開催された。殖産興業を第一の目的としたこの内国勸業博覧会では、展示品を素材や価格、効用などの基準で比較し、有益と無益の品を選別する目をもつことが民衆に期待されていた。吉見は、この空間においては「珍物や奇物を面白がったり、霊宝を拝んだりするのはわけが違った」と指摘している (吉見1992)。まさしく、日本にもこの時期から「博物学的なまなざし」が浸透し始め、一方で「見世物」が影をひそめるようになってきたと考えてよいだろう。

日本の動物園も、博覧会とほぼ同時期にヨーロッパから持ち込まれている。日本で最初の動物園は、1882年に開設した上野動物園である。それまでも客寄せのために孔雀を飼育していた茶屋などは存在しており、若生はこれら「動物を展示する民営の園地」である孔雀茶屋・花鳥茶屋を、日本人が遊園地の一種ととらえてきた動物園の源流であると論じている (若生2010:17-23)。しかし、あくまでもヨーロッパ由来の博物学的形式をとった動物園は、上野動物園が最初であった。元上野動物園園長の中川は、孔雀茶屋と動物園を比

較して、「外見上、類似的な面が全くないとはいいい難いにしても、その設立の趣旨に於て基本的な差」があるとし、上野動物園を日本で最初の「科学的動物園」と位置付けている（中川1975：46）。つまり、上野動物園は、明治以前に日本で動物が集められていた場とは異なり、ヨーロッパで生まれた秩序化された空間の再現を目指していたということになる。

石田によると、昭和40年代以降、ほとんどの動物園で「比較」と「統一」という考え方が取り入れられるようになった（石田2010）。確かに、現在の動物園を見ても、アフリカゾーンやアジアゾーンなどの生息地ごと、あるいは爬虫類館や昆虫館など動物の種類ごとに分類するなど、なんらかの基準に沿って動物が分類・展示されている。元多摩動物公園園長の矢島は、動物園展示の配置を、分類学的展示法、地理学的展示法、ハビタート展示、行動別展示の4種に分類している（矢島1989：22-24）。また、成島は動物園展示を動物分類学的展示、動物地理学的展示のほか、バイオーム展示を入れて3種類に分類している（成島2000：182-184）。分類の方法にはいくつか種類があるものの、いずれにせよ園内の動物がある条件に従って整理、体系化されていることがわかる。そしてこのような見せ方は、対象を分類し、全動物を相対的に見せるという点で、近世の動物見世物とは大きく異なる。

4-2. 動物園における「見世物」の位置づけ

少なくとも現在の日本の動物園において、動物を「見世物」にするのは最も避けるべきこととして考えられている。例えば、千葉市動物公園の「立ちあがるレッサーパンダ」風太がメディアで話題になったとき³、旭山動物園の副園長（当時）が「あの取り上げかたは『芸』です。『見せ物』です。」「レッサーパンダを『見せ物』にしないで下さい。」⁴と厳しく批判した。石田も、実際に動物園が見世物であるか否かはともかくとして、動物園では動物を「見世物にしている」と受け取られてはならないと言及している（石田2006：2-3）。

展示物を見世物にすることへの批判は、動物園に限ったことではない。木下が美術に対して、「昔から見世物は芝居よりもまだ低い最底辺の催しというのが通り相場、見世物を持ちだしておけば、どんな批判も体裁だけは整う。だから、美術館関係者は、美術展が見世物と呼ばれることをひどく嫌う。」と指摘しているように、動物園や美術館など現在の博物館施設では展示の見世物性は一貫して否定されている（木下2010：17-18）。

▶3 朝日新聞・千葉・1地方2005年5月22日「お立ち台のレッサーパンダ・風太に立ち見 千葉市動物公園／千葉県」など。

▶4 旭山動物園「ゲンちゃん日記 レッサーパンダを『見世物』にしないでね」<http://www5.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahi-yama-zoo/zoo/genntyann/lessor.html>（2015年6月閲覧）

5 残り続ける見世物性 ―当時の新聞や動物園誌からの考察

5-1. 二重のまなざしを備えた空間

ここまで、見世物的空間からヨーロッパ由来の博物学的空間へ移行する過程を簡単に整理した。博物学的空間では人々に、見世物を見るのとは異なり、

対象を博物学的にまなざすよう暗に要求していたわけだが、実際のところそう簡単に人々のまなざしは切り替わるものだろうか。

博覧会には、民衆に新たなまなざしを根付かせ殖産興業へと導こうという政府の思惑があったことは前述の通りである。第一回内国勸業博覧会では、展示品は見世物とは異なる旨の注意書きがなされていた。しかし、1903（明治36）年の第五回内国勸業博覧会では民衆への啓蒙が強化されるどころか、むしろ「祝祭性」が際立っていた（橋爪1990：164）。会場には、ウォーターシュートや、台湾芝居、外国サーカスが催され、金髪の米国女優による幻想的な舞踏を観覧する「不思議館」も建てられた。また、1907（明治40）年の東京勸業博覧会では、人魚やジュゴンなどの見世物も人気を博していた。これでは、教育・啓蒙というよりも見世物興行と大差がないようである。

動物園に関しても、すぐに科学的動物園が根付いたわけではない。1882（明治15）年、教育・啓蒙のための施設として上野動物園が設立されたが、そのすぐ近くに「珍獣」の宝庫である浅草花屋敷が人気を博していたことに注目したい。小沢によると、当時上野動物園での飼育動物は殆どが国産動物だった一方、すぐ近くにあった浅草花屋敷は見世物として珍獣を飼育していた（小沢2006）。小沢は、「上野で不足しているものを浅草で補うという発想が見て取れる」と述べているが、この「不足しているもの」とはまさしく珍獣がもつ見世物性であったと考えられる（小沢2006：150-151）。

動物園の歴史をまとめた佐々木は、上野動物園の誕生当時の職員数は10名にも達していなかったと推定し、「今から考えれば実にみすばらしいものであった」と想像した（佐々木1987：154）。飼育環境が劣悪であったという当時の状況に対し、佐々木は「近代的動物園の要件である科学的な裏付けに、物的にも知的にも欠けて」おり、「名ばかりの動物園であった」と厳しく批判している。また、渡辺も軍隊や経済、西洋音楽、西洋美術などを日本が驚くべき速さで習得にしたことと比較して、「動物園という制度に関しては、ほかの分野に見られたような積極性、情熱が感じられない」と述べている（渡辺2000：44）。これらの批判からは、上野動物園が簡単に「博物学的な空間」へと移行しきれなかった様子がわかる。

以上の点から、明治になっても人々のまなざしは博物学的なまなざしへと完全に移行したのではなく、展示物に対する見世物性への期待が続いていたと考えられる。つまり、「教育・啓蒙」の裏には、相対する存在として認識されていた見世物が依然として存在しており、博覧会や動物園はその二重のまなざしを備えた空間であったと推測できる。

5-2. 事例：動物園で初めて飼育した猩々

次に、新聞記事や動物園誌を用いて、動物園における人々の期待、行動、そして動物園の取り組みに、「博物学的なまなざし」とともに存在する見世物性がどのような形で現れていたのかを明らかにする。

現在は、動物園に新たな動物を迎え入れても、よほど話題を呼ぶ動物でない限り新聞で大きく取り上げられることはない。しかし、動物園が設立されて間もない頃は、何日にも渡って新たに来園した動物の様子を報じることも

あった。本研究では、まず猩々（オランウータン）の例を取り上げる。高島の『動物渡来物語』によると、オランウータンが日本に初めて渡来したのは1792（寛政4）年のことである。その後何度か渡来し、薬品会⁵などに出されたようである。オランウータンが動物園に初めて展示されたのは1898年のことであった。高島は、「成長した牡が賣され大評判となり多数の観覧者を吸引したが其の年の11月には死んだ」という記述を残している（高島1947：3-4）。この猩々について、当時の朝日新聞と読売新聞を調べ、記事の見出しを表1にまとめた。

上野動物園が設立されてからこのオランウータンが来日するまで、動物園動物に関してはカササギや「白熊」⁶が記事になっていたが、いずれも単発的なものである。数回に渡って同じ動物が報じられたのは、このオランウータンが初めてである。『上野動物園100年史』によると、上野動物園が初めて飼育したこの個体は、1898年7月5日に購入されて以降たった100日で死亡している。にもかかわらず、表1に示す通り、その100日の間に何回にも渡って猩々の様子が報じられている。

以下、どのような報じられた方をしていたのかをいくつか引用する。

「猩々」

…（前略）顔の幅四寸長さ八寸あり色は深黒にして其肌は俗に鯨と称するものに似て滑ならず眼は茶色にして圓く鼻は普通の猿の如く口は人間に似て毛は栗毛の稍紅きものなるが長き所は五寸五分あり胴の長さは一尺八寸、手の長さ三尺五寸、掌の長さ四寸五分にして年齢は八歳の見込みなりといふ…（後略）（『朝日新聞』1898.7.11朝刊）

▶5 本草学者らによる薬種や物産の展示・情報交換会のこと。

▶6 『上野動物園100年史』によれば、この「白熊」とは、ホッキョクグマのことではなく1891年に飼育を開始したヒグマのアルビノを指す。

表1 1898年に来日した「猩々」に関する記事一覧

	朝日新聞	読売新聞
7月11日	猩々	
7月12日		動物園に猩々来る
7月26日		猩々と駱駝
9月4日	猩々	
9月15日		猩々の大當り
9月19日	猩々の天覧	
11月22日	新陳代謝	
11月29日	動物園の猩々病む	
11月30日		動物園の猩々死す
12月1日	猩々遂に死す	
12月2日	一口話し	
12月3日	猩々と大蛇の死期	猩々と蛇とに就き
12月4日	猩々と大蛇の剥製	

「動物園に猩々来る」

…（前略）猩々総丈四尺餘面長八寸胴長二尺五寸餘手三尺強足二尺弱躰量凡そ十一二貫あり…（中略）…猩々は熱帯地方の産にして、おもにスマタラ、ボルネオ等の深山中好んで樹木の頂上などに棲めば容易に之を捕ふる能はざるのみならず此の地方を離れては何所にも永くは生息せず之を飼養するにはきわめて困難を感じるものなれば…（中略）…毎日人間並みに三飯とし一飯の量玉子一個に握飯1個の割合にて與へしに効あり 肉食は一切好まず水を飲ませしに下痢する事あり…（後略）。
（『読売新聞』1898.7.12朝刊）

これらの記事には、オランウータンの身長だけでなく、顔・胴・手・足の長さまで詳細に記載されている。また、オランウータンの生息地がスマトラ島・ボルネオ島であり、野生では樹上生活をしている旨、動物園での餌の量、そして肉類は食べないことなど、現在の動物園の解説パネルと同等かそれ以上の内容が事細かに記されている。

「猩々と蛇に就き」

豫て世人の注視と惹き居たる動物園の猩々並びに蛇は暖国産のものなればとて係員も夙に其管理法に苦心し…（中略）…常に七十五度乃至八十度の温を與へ猩々には煮沸牛乳葡萄龍眼肉其他平生の嗜好品を與へ…（後略）。
（『読売新聞』、1898.12.3.朝刊）

これはオランウータンが死ぬ直前の様子を記した記事であり、体調を崩した個体のために飼育員が試行錯誤で看護を行っている様子を示している。記事にはオランウータンのために調節した温度まで「75度ないし80度」と細かく記されている。これらの記事を見る限りでは、奇怪なものを見る好奇心が表れているというよりも、坦々と事実を詳細に伝えており、珍獣・奇獣の見世物を目の当たりにするような驚きや興奮、見世物口上のような大げさな表現は見られない。また、動物を霊獣や、ご利益がある存在として捉えている様子も伺えない。しかし、次の記述に注目したい。

「猩々の大當り」

動物園の猩々は到着早々評判高く最初の土曜日には縦覧人二萬と越えたりと噂されしが其後も市内の取沙汰切りにて絵草紙となり玩具となりて…（中略）…やはり猩々の一人舞臺にて骨牌に雙六に變絵に皆猩々の入らぬはあらずと云ふ…（後略）。
（『読売新聞』、1898.9.15朝刊）

この記事は、飼育開始から2カ月後、オランウータンが大変な人気を呼んでいたことを示すものである。見出しの「大當り」という表現、一日で二万人の民衆が集まったという点から、オランウータンへの注目の仕方が幾分か話題性を重視した見世物的であったことが窺える。しかし、さらに重要なのは、このオランウータンが絵草紙や玩具、かるた、双六になっていた点で

ある。江戸の動物見世物の例として先に挙げたラクダも、玩具や双六、絵入り凧となり販売された。このように動物をあしらった商品が人気を呼ぶという現象は、大衆が動物を科学的・分類学的に捉えているのとはまた異なった方法でも動物を捉えていたことを示している。ただし、少なくともこの新聞記事や、当時の動物園について書かれたその他の記事・文献からは、ラクダ同様に狸のような飼育動物にもご利益が謳われていた点や、オランウータンに対する畏怖の感情があったことは示されていない。オランウータンに「ご利益」を見出していたのかはともかくとして、少なくとも民衆の動物に対する行動や消費の仕方は見世物に対するそれと共通しているといえる。

5-3. 事例：ハーゲンベックとの動物交換

オランウータンの記事には動物の「種」に関する詳細なデータが記されていた一方、人々がオランウータン目当てで多数押し寄せ、動物見世物と同様の消費の仕方、すなわち玩具や絵草紙の製作を行っていたことが明らかとなった。以下の記事は、上野動物園が開園して51年後の1933（昭和8）年のものである。

「動物交換 上野動物園とハーゲンベック 渡来する珍奇な連中」

ハーゲンベックの動物園と上野の動物園との動物交換は、ハーゲンベック氏と古賀園長との交渉の結果22日決まりに決定した。ハーゲンベック側からは、マンドリル四頭、マントヒヒ二頭、大ありくひ一頭、コンドル三羽、ベニヅル六羽、サイテウ一羽、白鳥二羽…（中略）…このうちマンドリル、マントヒヒ、大ありくひ、ベニヅル、サイテウは我が国に今迄なかった動物…（中略）…上野動物園では今迄セザンコを大ありくひと呼んでゐたがこれがほん物で…（後略）。

（『朝日新聞』、1933.4.23夕刊）

この記事は、上野動物園がドイツのハーゲンベック動物園と動物交換の交渉を行ったことを報じている。見出しには「渡来する珍奇な連中」とあり、「我が国に今迄なかった動物」の存在が強調されている。開園後51年経っても、動物園を取り巻く人々が動物の新奇性・珍奇性に価値を置いていたことがわかる。

5-4. 事例：異種交配の動物

しかし、無限に新たな動物が発見され、動物園にもたらされ続けるわけがなく、動物園も動物それ自体の新奇性・珍奇性を押し出す機会には恵まれなくなる。そこで昭和30年代に入り登場したのが、ライオンやトラ、ヒョウ、ジャガーなどを組み合わせた、いわゆる異種交配の動物である。日本で初めて成功したのが阪神パークにおけるレオポン（オスのヒョウとメスのライオンの交配）であり、その後タイポン（オスのトラとメスのレオポンとの三種交配）や、旭山動物園でドブラ（シマウマとロバの交配）などが作られた（石田2010）。石田は、これら異種交配はあくまでも「研究課題として」行われた

▶7 1961年9月3日に行われた座談会である。当時の上野動物園園長古賀忠道氏が司会となり、神戸市王子動物園長、福岡市立動物園長、神戸市立須磨水族館長、甲子園動植物園長、横浜市毛山遊園地園長、大洗水族館長、向ヶ岡遊園長、名古屋市東山動物園技術係長、浜松動物園庶務係長、多摩動物公園長の計11人が「最近の動物園水族館をかえりみて」という題で行った。

と述べている。しかし、1961（昭和36）年に全国各地の動物園園長による座談会が行われた際、次のようなやり取りが見られた⁷。

土井（甲子園動植物園園長）

「楽しみながら社会科の勉強ができるようにというところから、総合的なことをねらっていますが、やはり大ぜいをひっぱるということが第一ですね。」

古賀（上野動物園園長）

「そういう点では珍しい動物ということになりますかな。」

土井

「そういう点からレオポンをつくったのですが、これが非常な人気をよんで入園者もふえ収入の面でもふえ、はじめの目的も達せられるようになっていそうですね。やはり珍しい動物は必要だと思います。」

（東京動物園協会1961）

この二人のやり取りからは、純粋な研究目的だけではなく、人々の新しい動物を見たいという欲求、珍奇な動物への好奇心に応える形で、動物園がレオポンという新種の動物を誕生させたことがわかる。この点からは、大衆の目が勝手に珍しい動物を話題にしていただけでなく、動物園側でさえも動物の珍しさを重要視していた点が伺える。なお、これら異種交配による動物たちの多くは、昭和50年代には姿を消している（石田2010）。

5-5. リタ嬢に代表される動物芸

先述した近世の動物見世物の形態の中には、珍しい動物それ自体を見せる他に、さほど珍しくはない動物に芸をさせるといったものがあった。同様に、近代の動物園の中にも、動物に芸を仕込んで大衆に見せる一種のイベントが行われていた。動物園史の中で最も有名な動物芸の例は、天王寺動物園のリタ嬢と呼ばれるチンパンジーの芸であろう。リタは、1932年に大阪市立動物園（現・天王寺動物園）がコンゴから入手した、当時推定6歳のチンパンジーであった（中川2009：44-46）。リタがどのような芸をしていたのかは、以下の記事に詳しく書かれている。

「おりこうな類人猿、リタ嬢 食べ物も衣服もすべて人なみ 自転車と竹馬が大得意 お行儀のよいにも感心」

…（前略）食後には煙草の『朝日』か『敷岳』を決ま一つ一本うまさうにスパスパやります。それも元は、口から吸って鼻からだしたのださうですが、健康上よろしくないと叱られて今はたゞ口でふかすだけです。

…（中略）…もっとも得意とするのは自転車乗りと竹馬。自転車といつても三輪車ではありません。子供用二輪車で、どうかすると泥よけに足をかけてヒョイと飛乗ることもあるさうですが、大抵ペダルに足をかけて…（後略）。

（『朝日新聞』、1933.12.4夕刊）

リタはこの記事の通り、煙草をふかしたり、自転車に乗ったり、竹馬に乗る芸を披露した。その他にも、服を着て、オルガンを演奏し、机に座って茶碗と箸でお粥を食べるなどのパフォーマンスをしていた⁸。リタの人気は、この時期の大阪市立動物園の入園者数が上野動物園を越えるほどであった。中川は、昭和初期の動物園入園者数の3割が動物芸を楽しみに来園しているとの報告を載せている（中川2009）。

戦後も、動物芸が各地の動物園で行われていたことが確認できる。例えば、京都市動物園では1951（昭和26）年にチンパンジーの雌雄の調教が行われ、自転車乗りが披露されている。1953（昭和28）年からは、ゾウのラッパ吹きやアシカの平均台渡り、イヌの車引きが行われた。名古屋市東山動物園では1963（昭和38）年から始まったゴリラショーが人気を呼んだ。ゴリラショーでは、太鼓や笛の演奏の他ゴリラが20種類以上の芸をこなしていた⁹。これらのショーは、京都市動物園では1956（昭和31）年、東山動物園では1968（昭和43）年に終了している。

上野動物園では、1952（昭和27）年から「全日本猿まわし大会」が開かれた。しかし、『上野動物園百年史』によれば、翌年・翌々年にはその大会で香具師による「親の因果が子に報い、云々」との口上が入るようになり、1956（昭和31）年にたった4年の歴史で終了している（恩賜上野動物園1982）。この口上はまさに見世物で用いられていたものである。

このように、珍しい動物の輸入や生産のみならず、イヌやアシカ、サルなど身近な動物に芸をさせていた点も、近世の動物見世物の形態と類似している。芸を動物に仕込んでいたのは当然動物園側であり、見せる側である動物園でさえも積極的に展示に見世物性を導入していたことが伺える。

6 結論

明治以降、興行としての動物見世物が廃れていく一方で、代わりに大衆が動物を見る場として確立されたのが動物園であった。動物を見る場が見世物から動物園へと変化したのに伴い、人々の動物の見方も科学的に対象を観察して学ぶようになったというのが一般的な説である。この通説に対して、本稿では新聞記事や動物園誌を再検証することで、動物園誕生以前の動物見世物へのまなざしが明治以降の動物園においても根強く残存してきたことを明らかにした。

例えば、動物園は設立から50年以上を経ても、まだ見たことのない動物を求めて外国の動物園から動物を仕入れていた。設立70年を経たころには異種交配により新種の動物を生み出した。異種交配に関しては、動物園の園長自らが「珍しい動物は必要である」との発言をしている。動物芸についても、5－5節で紹介したリタ嬢のように、チンパンジーやゴリラ、イヌ、サルなど、当時さほど珍しくはない動物に芸を仕込み、動物園で披露していた事例がい

▶8 朝日新聞1933年12月4日 夕刊
「お猿の全快祝い大阪動物園の
リタ子ちゃん」、等を参照。

▶9 東山動植物園の情報誌『ひがし
やま16号2011春』pp.12-13.より。

▶10 ただし、今後の検討課題として一点注意しておきたいのは、近世の動物見世物をまなざす上で人々が抱いていた「ある種の宗教的観念を背景とする畏怖の感情」の存在である。管見する限り、動物園に関する過去の新聞記事や動物園誌からは、動物に神秘性を見出したり、畏怖する存在として見なしたり、ご利益を期待するような様子は見られない。珍奇なものを求める一方で、相手を畏怖するという見方は動物園におけるまなざしの中には認めることができなかった。吉見は、博物学的なまなざしは帝国主義思想に裏打ちされている点を述べており（吉見1992：170-186）、それに従うならば、畏怖の対象でもあった外国産動物が、近代に入り、人間の支配の対象へと変化したということになる。人間と動物の関係性の変化については、今後さらなる考察が必要である。

▶11 朝日新聞1973年1月14日朝刊「パンダと動物園記者 デスク日記」より。

くつも挙げられる。現在の動物園は、動物を見世物にすることに強く拒否の姿勢を示している。だが、当時の動物園が意図的に見世物性を取り入れていたのか、見世物的であることに無自覚なままで前近代の動物見世物と同様の行為をしていたのかは定かではないものの、その歴史において園が自ら動物を見世物と同様に扱っていたことが明らかになった¹⁰。

しかし、昭和40年から50年頃にかけて、動物園側の動物の見せ方に大きな変化が現れている。1975（昭和50）年に中川が動物園の科学的側面に着目し、「博物館的動物園」を提唱している（中川1975）。4-1節で述べたように、石田がほとんどの動物園で「比較」と「統一」という考え方、つまり近代的な動物園の特性である科学性と統一性が取り入れられるようになったと指摘したのは、昭和40年以降の動物園についてであった（石田2010）。さらに、佐々木が日本の動物園誕生時を振り返り、「近代的動物園の要件である科学的な裏付けに物的にも知的にも欠けて」いたと批判した著作の初版本が発売されたのも、1975（昭和50）年である（佐々木1987）。

つまり、昭和50年代になると、動物園は新種・珍種の公開や動物芸などのわかりやすい形の見世物的展示を次々と縮小させ、博物学や科学の面をより意識するようになったと考えられる。動物園が日本で初めて設立されたのが1882年であるので、見世物性が大幅に縮小され、より「近代的」な施設となるのには設立から100年近くを要したことになる。

また、動物園が見世物性を排除しようと心がけるようになったとしても、一方の大衆は依然として見世物性を求め続けていたことも指摘できる。例えば1970年代、上野動物園にジャイアントパンダが導入されるのに伴い、パンダブームが起きた。その際、「専門家の間でもナゾの多い珍獣の様子を早く知りたい」との要望があり、当時の飼育課長が連日記者会見をすることとなった¹¹。これは、5-3節で述べた外国産動物に大衆が沸く様子と同様の事態であろう。動物の見せ方における新奇性という面では、昨今メディアで大きく取り上げられた行動展示も、同様に見世物的な部分を引き継いでいるといえる。旭山動物園は「決して優秀な個体のすばらしい行動」を取り上げるのではなく、また動物に「強制するようなことがあっては絶対に駄目」と暗に動物芸を否定している（旭山市旭山動物園2011：12）。しかし、それが野生由来の行動であれ、人間によって仕込まれた芸であれ、動物による思いがけない行動に人々が驚き、話題を呼んで多くの人が集まるという図式は、やはり近世の動物見世物に通じている。

動物園を取り巻く見世物と博物学的なまなざしの関係を、動物園と大衆の両者に関連付けて考えると、以下のようにまとめることができる。近代の産物である動物園は、少なくともその展示形態としては、博物学的なまなざしを内面化するよう人々を啓蒙する場であった。事実、日本に動物園が設立して間もないとき、動物園では主に国産動物が飼育され、「珍獣」を見て楽しむ見世物の役割は近隣にある別施設が担っていた。博物学や科学の視点で動物を見せる場と、娯楽として動物を見世物にする場の共存は、形式的には避けられていたはずであった。しかし、そのうち動物園は自ら見世物的な側面を吸収し、昭和50年頃までの長きにわたって、近世の動物見世物と類似した

動物の見せ方をするようになった。一方の大衆側も、動物園の設立当初から一貫して見世物性への期待を内包しながら動物を見ており、その姿勢は動物園自体が見世物性を否定している現在に至るまでも続いていると考えられる。

近世の動物見世物が動物園にこれほど浸透し続けていたことは、日本の動物園では西洋からもたらされた「近代性」の定着が難航していたことを示している。吉見も見世物は博覧会の大衆性を支えてきたと述べているが、それでも世界の博覧会で見世物性が頂点に達したのは1900年、日本では1903年の第5回内国勸業博覧会以降であると指摘している（吉見1992）。だが、日本の動物園の場合は、1900年前後に見世物性が頂点に達するどころか、むしろ異種交配による新種の誕生やゾウや類人猿などの動物芸の流行など、昭和後期になるまで見世物性がますます推し進められてきた様子である。さらに補足するならば、2000年代に入ると、行動展示や生息環境展示の登場など動物の見せ方に関する大幅な改革が始まっている。つまり、見世物性が縮小されておよそ30年たらずで、動物の見せ方にまた新たな変化が生じているのである。5-1節では、西洋から日本への動物園の定着は完全ではなかったという佐々木や渡辺の指摘を記したが、本稿はそれらの説を近世の動物見世物の長きに渡る残存という観点から補完しているといえる。

7 おわりに

本稿は、近代動物園において、特に「動物を見ることの楽しみ」という面に近世動物見世物と似たようなまなざしが存在していると考え、動物園史において動物見世物の要素がどのように残存してきたのかを明らかにすることを試みた。

第二節では、動物園のレクリエーションに関する言説を概観した。そして、これまでの動物園では教育や種の保存などとは対照的に、レクリエーションの内容について具体的に考察されてこなかったことを指摘し、近世の動物見世物がレクリエーションの一つとして考えられることを仮説として提示した。次に第三節では、近世に流行した動物見世物の性質や特徴について整理し、第四節で、博覧会や博物館、動物園においてその見世物がいかに否定される存在となっていくのかを述べた。第五節では、新聞記事や動物園誌を用いて、否定されるべきであったはずの見世物性が動物園側の動物の見せ方においても、大衆側の動物園への期待においても存在してきたことを具体的に示した。

動物園の教育面やそもそもの設立の意図を考えると、確かに動物見世物の性質はそれらに相応しいものではないだろう。しかし、動物園の歴史を振り返れば、動物見世物の要素は動物園の設立以降随所に見られている。動物を見世物としてまなざすというのは、動物園におけるレクリエーション、すなわち動物を「見る楽しみ」の重要な要素であるといえる。

謝辞

本稿の完成に際し、懇切丁寧にご指導くださった山田義裕先生、数々の有益なアドバイスをくださった2名の査読委員の先生に厚く御礼申し上げます。なお、本稿の一部は、全日本博物館学会第40回研究大会（2014年6月明治大学）にて口頭発表を行いました。参加者の皆様から貴重なコメントをいただきましたことを深く感謝いたします。

引用文献

- Altick, R. D., 1978, *The Shows of London*, Cambridge, The Belknap Press of Harvard University Press [小池滋監訳, 1989, 『ロンドンの見世物 第2巻』, 国書刊行会.]
- 朝倉無声, 2002, 『見世物研究』 筑摩書房.
- 旭川市旭山動物園, 2011, 『旭山動物園の動物図録』 (改定第二版) 旭川振興公社, 9-12.
- 古河三樹, 1970, 『見世物の歴史』 雄山閣出版.
- 郡司正勝, 1991, 「見世物の世界」 郡司正勝・関山和夫編 『見世物雑誌』 三一書房, 234-242.
- 橋爪紳也, 1990, 『明治の迷宮都市』 平凡社.
- 廣瀬聡弥, 2013, 「動物園見学による幼児の興味や関心のある動物の変化と諸要因の関連」 『ヒトと動物の関係学会誌』 33: 58-66.
- 堀江典子・平松玲治・森本千尋, 2011, 「都市公園における博物館的機能展開の考え方」 『公園管理研究』 5: 7-12.
- 石田戢, 2006, 「動物は見世物か」 石田戢・赤見理恵・赤見朋晃編 『動物園研究』 10: 1-3.
- 石田戢, 2010, 『日本の動物園』 東京大学出版会.
- 伊藤寿郎, 1987, 「現代博物館考」 横浜市企画財政局都市科学研究室 『調査季報94号特集 博物館を考える』, 2-26.
- 加藤秀俊, 1965, 『見世物からテレビへ』 岩波書店.
- 川添裕, 2000, 『江戸の見世物』 岩波書店.
- 川添裕・木下直之・橋爪紳也, 2003, 『別冊太陽日本のこころNo.123』 平凡社.
- 木下直之, 2010, 『美術という見世物——油絵茶屋の時代』 講談社.
- 古賀忠道, 1950, 「私の考えている動物園」 財団法人東京動物園協会 『動物園新聞』, 8.
- 黒田日出男, 1994, 「見世物と開帳——〈見世物〉史としての近世」 黒田日出男・ロナルド・トビ編 『行列と見世物 朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす17』 朝日新聞社, 58-69.
- 松浦寿輝, 1998, 「スペクタクルとしての動物——動物園というイデオロギー装置」 メディアデザイン研究所編 『10+1』 12. INAX出版, 2-17.
- 内藤正敏, 2009, 『江戸・都市の中の異界』 法政大学出版局.
- 中川志郎, 1975, 『動物園学ことはじめ』 玉川大学出版部.
- 中川哲男, 2009, 「戦前、擬人化を象徴する天才チンパンジーがいた——一世を風靡した大阪市立動物園の「リタ嬢」」 『動物観研究』 14: 44-48.
- 並木美砂子, 2005, 『動物園における親子コミュニケーション——チンパンジー展示利用体験の比較——』 風間書房.
- 成島悦雄, 2000, 「動物園」 加藤有次編 『博物館展示法』, 雄山閣出版, 181-186.
- 小沢詠美子, 2006, 『江戸っ子と浅草花屋敷——元祖テーマパーク奮闘の軌跡』 小学館.
- 恩賜上野動物園, 1982, 『上野動物園百年史』 第一法規出版株式会社.
- 佐々木時雄, 1987, 『動物園の歴史——日本における動物園の成立』 講談社.
- 佐藤保雄, 1954, 「上野動物園の働き」 『どうぶつと動物園』 59, 2.
- 関山和夫, 1991, 「小寺玉晃と『見世物雑誌』に見る寄席興行」 郡司正勝・関山和夫編 『見世物雑誌』 三一書房, 223-233.
- 市民ZOOネットワーク, 2004, 『いま動物園が面白い』 岩波書店.

- 高島春雄, 1947, 『動物渡来物語』 日本出版社.
- 田中正之, 2013, 『生まれ変わる動物園——その新しい役割と楽しみ方——』 化学同人.
- 田之倉稔, 2005, 「見世物の演劇性と演劇の見世物性」『見世物学会・学会誌』3: 182-189.
- 東京動物園協会, 1961, 「園長さんたちの座談会——最近の動物園水族館をかえりみて」『どうぶつと動物園』(13), 東京動物園協会, 6-9.
- 若生謙二, 2010, 『動物園革命』 岩波書店.
- 渡辺守雄, 2000, 『動物園というメディア』 青弓社.
- 矢島稔編, 1989, 『動物園へ行きたくなる本』 リバティ書房.
- 吉見俊哉, 1992, 『博覧会の政治学——まなざしの近代』 中央公論社.

(平成27年4月15日受理、平成27年7月10日採択)